

ニ
ユ
ー
ム
ー
ン
—
暗
夜
—

30分も部屋に居ると肌寒いほどに冷房が効いてきた。

かまいませんか、と一言断わって、ガラス窓を開ける。

わずかな風を入れようと思ったのだが、夏風は中庭のはるか上空を旋回しているだけらしい。風は入らずに、夕方の湿った熱と、おびただしい量の蟬の声が雪崩を打って室内へ押し寄せてきた。校舎際に沿って植えられたケヤキは彼らのデーツスポットのようだ。

雲が速いな。

上は風が強そうだ。

こんな日は飛行機も飛び難いだろう。

「……うちの科も今年は研究費を削られてねえ、身動きが取れんのだよ」

蟬時雨に頭を打たれたように、佐々木教授は自分の白い髪を撫で付けた。

「元々資金が潤沢にある大学でもないのねえ、贅沢は言えんし。これまでもずいぶん無理したんでねえ」

午後五時には帰宅するのが日課という教授は、もう家へ帰りたくて気もそぞろらしく、髪の下には着ている白衣のボタンを指先で外したり留めたりと、ひっきりなしに手遊びを繰り返している。着ている白衣の裾には茶色く丸いシミがある。散らかった研究室の中のさらに乱雑に散らかったデスクの上には、白衣のシミの原因とおぼしきコーヒーマップ。

「どうしたもんかねえ……」

「そこを何とか遣り繰ってくださいよ、先生。二週間試されて、こいつの使い勝手もおわかりいただけましたでしょう？ お勧めですよ、こいつは」

撤去しようと装置の機材へ伸ばした俺の腕を軽く掴み、佐々木教授は二度三度と強くうなずいた。

「とりあえずもう一週間、置いてみてよ。それでも一度検討してみよう」

二週間でも試用期間には長すぎる日数なのだ、それをさらに一週間粘ってなんとか費用を捻出しようというのだから、教授がこの製品をいたく気に入っているのは間違いない。

これは次回で契約決定だな。

「他ならぬ先生の仰せでは嫌とは申せませんね。では、あと一週間」

につこりと微笑んで見せると、翁面に似た顔の佐々木教授が子どものような笑顔になった。

「よし。それじゃまた来週な、仁科君」

「色よいご返事をお願いしますよ、先生」

わかったわかったというふうにならずきながら、教授は手早く白衣を脱ぎ始めた。

この大学に地球環境科が新設された三年前からの顔馴染みである佐々木教授は、堅実派でやかまし屋タイプの先生だ。なかなかなことでは乗り気にならない教授がここまで執着するというのだから、本当に費用の点だけが問題なのだろう。俺の個人判断で許される範囲でなら、何とか相談に乗れないものでもない。なんと言ってもお得意様だ。

「じゃあ茶屋君、あとは頼んだよ」

お気に入りの黒革の手提げカバンを手にした佐々木教授は、デスクに腰を寄りかからせて側で見ていた助教の茶屋へその声をかけ、ラボのドアを開いた。次の瞬間にはもう疾風のような勢いで廊下へ飛び出していく。

「お疲れ様でした……って、もう行っちゃったな」

茶屋はエラの角ばった顔に苦笑を浮かべて、デスクから身体を起こした。のんびりと部屋を歩いていくと教授の開放して行ったドアを丁寧に閉め、振り返って眼鏡の向こうから俺へいたずらを企むような眼差しを向ける。

「頼まれちゃったけど……どうする。とりあえず食事に行く？ 会社には戻らなくてもいいんでしょ？」

「そうですね。ちよっとお腹も空いたかな」

二階の窓の下を学生たちの未知数を詰めた頭脳が通り過ぎていく。ゼロなのか∞なのか、数年前には自分もそう見られていたであろう先の読めぬ頭たちを眺めながら、窓を閉めた。